

# ゴットフリート・ベンとアルフレート・ボイムラー

——「占星術的」芸術観とナチズム——

石田 圭子

## 序

ドイツ表現主義の詩人としてつとに有名なゴットフリート・ベン（一八八六—一九五六）は、ナチスを支持した詩人としても知られている。表現主義は一般に、ナチスが開催した退廃芸術展によって弾圧されたといった事実などから、ナチズムと敵対したという印象を持たれることが多い。しかしながら一方で、今日では、表現主義とナチズムとの関係性が注目されるようになっており、<sup>1</sup>ベンはその代表的存在としてしばしば問題視され、論じられている。<sup>2</sup>

一方、アルフレート・ボイムラー（一八八七—一九六八）は、ベンと同じ時代を生きた美学者・哲学者・教育学者で、ナチスの教育・文化政策に大きな影響を与えたイデオログのひとりである。彼の世界観・歴史観は、後にヒトラーやアルフレート・ローゼンベルクが展開した民族主義的世界観の先触れともなった。また、ボイ

ムラーはベルリンで行われた焚書の際には、その陣頭に立つて指揮をしたと言われる。そうしたことから、ボイムラーは、ナチスの思想の形成に寄与し、実際の政策にも携わった「御用学者」であったと一般に評価されている。

これまで、ボイムラーをはじめとするナチズムの美学や思想研究がはかばかしく進展していないという事情もあり、<sup>3</sup>表現主義とナチズムの関係は指摘されてはいるものの、その美学上の関連性は厳密に考察されてこなかった。本論の目的は、ベンとボイムラーの思想を比較して、両者の美学の接近について明らかにすることである。その作業を通して、ナチズムと表現主義、ひいてはモダニズムとの間の秘められた関係の一端を明らかにしたいと考える。

両者の接近について、筆者はすでにニーチェ哲学の解釈などいくつかの点から論じたことがあるが、<sup>4</sup>今回はとくに両者の特異な歴史哲学に基づいた芸術観とその近似に着目したい。ここでは彼らの歴

史観および芸術観を「占星術的 (astrologisch)」という言葉で特徴づけたいと思う。ここで言う「占星術的」とは、とりもなおさず「神話的」の幻惑連関がさらに強められたものを意味する。

「神話」とはこれまでレヴィ・ストロースやロラン・バルト、カッシーラーをはじめ、多くの論者によって論じられ、その都度、別の意味内容を持つきわめて多義的な概念であるが、ここでの「神話」とは、神話の「象徴」「実在化」「因果的分析の無効化」という側面に着目するものであり、「形象の背後に何か深い真の意味が含まれていると信じ、それへの直観に基づいて歴史を理解しようとする態度」を意味している。

このような「神話」理解を前提とするならば、それを「占星術的」と言い換えることが可能であるだろう。占星術は無定形な星の並びと運行に名と秩序を与え、星座というイメージの背後に人間の運命を決定づける真理の存在を前提し、それを洞察しようとする。そして、黄道十二宮と人間の生の営みとの間に密接な関係を見出し、星の運行が人間の現実の生に直接的な影響を及ぼすと考え、巨大な宇宙的力が地上において実現され、表現を見出すと信じているのである。

ポイムラーは歴史を星の運行によって決定づけられるような、決定論的な必然的過程として理解し、さらに芸術を、あたかも星座のように、所与の深遠なる真理を表すとともに、現実の歴史を直接的に照らし出すイメージとして捉えた。そして、ナチズムに接近したベンもまた、それと近似した芸術観を有していた。つまり、ここで

「占星術的」という言葉によって「神話」をパラフレーズするときには付加される意味内容は、「決定論」的性格、および因果的分析を一切拒否することから生じる、象徴と歴史の「短絡」ショートカットあるいは「野合」である。

ここであえてベンとポイムラーの芸術観について「占星術的」という言葉を適用するのには理由がある。

それは、第一には、後で詳しく述べるように、ポイムラー自身が自らの歴史哲学を語るなかで「占星術的」という言葉を用いているためである。この言葉は、これも後に述べるが、ポイムラーが大きな影響を受けたエルンスト・ユンガーのエッセイのなかにも見出されるもので、ポイムラーのみに限定される特殊な概念使用ではなく、ある程度の普遍性を有している概念として理解される。さらに、同じような意味内容での「占星術」への強い関心は、当時のオカルト的思想、例えば神智学やユングの心理学などにも見られるものである。この「占星術」への興味の背後には、おそらく、混乱した社会のなかで不変の真理と指標を見出したいという欲求があったと思われる。そして、「占星術」への関心の拡大は、その時代の衝動によって促された、真理を含んだイメージと現実とを、分析や媒介抜きに、直観的洞察によって直結させようとする想像力の流布をも示している。この幻惑的な想像力はベンやポイムラー、そしてナチズムが共存した時代のひとつの特殊な精神のあり方を示すものであると考えられる。

つまり、ここでは、「占星術的」という用語を用いることによつ

て、ベンやボイムラーの芸術観を、そうした時代の背景から生まれた、特殊なものであるということを主張したいと考えるのである。ゆえにそれは、その時代性および幻惑の強化、「決定論」的性格と「短絡」<sup>ショートカット</sup>において、より一般的かつ普遍的に認められようと思われ神話的芸術観から区別されようものであると考える。

## 一・ボイムラーの芸術観

ボイムラーの芸術観を理解するうえで、彼のバッハオーフェン研究『神話的な時代』(Das Mythische Weltalter)とそれに基づく神話理解に触れないわけにはいかない。なぜなら、このバッハオーフェン論は同時にボイムラーの神話観および芸術観を語るものだからである。ボイムラーはそのなかで、バッハオーフェンに従って、ホメロスの詩やギリシャ悲劇をただ単に審美的に扱うのは誤りであり、そこに表現される象徴から民族の深層の生と精神を見なければならぬと主張している。この神話観こそ、彼の芸術観の根幹をなすものである。また、そこで展開される独特な歴史哲学は、彼の「占星術的」芸術観の前提をなしていると考えられる。

### (1) バッハオーフェンとボイムラーの歴史哲学

バッハオーフェン(一八一五―一八八七)は周知のごとく、「母権制」の主張で知られ、ローマ・ギリシャの神話の象徴解釈を通して、古典古代以前の太古に女性統治の社会、すなわち母権制の時代

があつたということを論じた歴史学者である。その主張は生前にはほとんど無視されるという憂き目を見たが、一九二〇年代のドイツで突然バッハオーフェン・ルネサンスとも言われるブームが起り、ベンヤミンを初め多くの論者によって熱心に論じられることになった。そのブームの起点になったのが、当時出版されたバッハオーフェン選集にボイムラーが寄せた序文「ロマン派の神話学者バッハオーフェン」である。これは、序文でありながら長大なもので、のちに『神話的な時代』(一九二六年)という別の書物として出版された。以下、このテキストを『神話的な時代』と呼ぶこととする。

バッハオーフェンが『母権論』(一八六一)のなかで語ったのは、闇と死、エロス、陶酔に満ちた太古の母性原理が支配した時代から、明るさ、知性、健全性に満ち溢れたギリシャ・ローマの古典古代、つまり父権制の時代への移行である。バッハオーフェンは父権制の支配のもとに埋没した母権制の世界の存在について哀惜をこめて語ると同時に、その移行を進化として評価するという両義的な態度を見せたのであるが、ボイムラーが解釈において強調したのは後者の進歩の観点である。この男性原理による女性原理の克服と支配を歴史の必然とするボイムラーの主張にナチスへの通路があつたことがしばしば指摘されるが、ここで注目するのは別の点である。

ボイムラーのバッハオーフェン解釈における最も特異な点は、バッハオーフェンが取り組んだ、神話を通じた歴史解釈、母権制と父権制の対比から、ある歴史哲学ないし歴史形而上学を取り出し

た、という点にある。ポイムラーは『神話的な時代』のなかで度々ヘーゲルを取り上げ、バツハオーフェンとの違いを論じながらも、両者を結びつけて論じている。それはとりもなおさず、ポイムラーがバツハオーフェンをヘーゲル流の進歩史観に倣った「歴史哲学者」として理解し、彼の著作を歴史哲学的観点から新たに組み直す<sup>8</sup> (MW219) (強調原文) ということを目論んでいたためだと思われる。

バツハオーフェンの歴史の方法は神話の象徴、「表徴世界 (Bildwelt)」を観照や想像力によって捉え、そこに潜む宗教的・文化的な観念を明かすというものであり、こうした方法で過去の真実を読み解くがゆえにバツハオーフェンはポイムラーによって歴史哲学者と呼ばれることになる (MW197)。ポイムラーは「神話はポエジーではない」と述べ、「神話は精神を吹き込むことによって人内なる自然 $\vee$ を開くもの」 (MW99) としている。さらに、「神話は先史 (Urzeit) に達するだけではなく、人間の魂の根源にまで到達する。」と述べ、この根源を「深淵 (Tiefe)」と呼び、「真実の基準」 (MW86) としている。また、「人類の象徴的表現、すなわち、人間存在の発展についての神話は普遍史である」 (MW297) と述べて、そうした神話のなかには「民族の未来の全て」が保存されているのであり、「その歴史のなかで進展していくであろうことは神話のなかに象徴的に暗示されているのだ。」 (MW101) と主張している。その結果、ポイムラーは神話について次のように帰結する。

「すべての発展の根源は神話のなかにある。神話はあらゆる歴史に先行し、歴史を規定する。神話が線を描き、その後を発展が従うのである。」 (MW199)

ここに至ってポイムラーは、あくまでも神話を読み解いて、そこから先史および古典・古代の世界に光をあてるという歴史探究の範疇にあったバツハオーフェンの試みを完全に超えてしまっている。そこでは神話と歴史の関係の方向性において決定的な違いが生じており、バツハオーフェンにおいて「神話の歴史化」であったはずのものが「歴史の神話化」へと転換されているのである。<sup>8</sup>

こうしたポイムラーの歴史観は、序章に述べた定義に従って、「占星術的」歴史観と呼ぶことができるだろう。実際に、ポイムラーはある個所で、「彼の (バツハオーフェンの) 歴史哲学は占星術的、な原則に基づいている」と述べ、さらには「いったい偉大な歴史哲学者が占星術師でなかったような試しがあっただろうか。・・・人間性を、ある必然にしたがって次々と導かれる人形態 $\vee$ が自ずと果たす一連の発展としてみなすような歴史哲学者は、誰しも $\wedge$ 占星術的 $\vee$ と呼ばれなければならない」 (MW293) (強調原文) と述べている。占星術が星の運行やそれが及ぼす表徴や兆しから、現在の具体的状況と未来を直観的に洞察しようとするものであるならば、この言葉はまさに神話の象徴から歴史を捉えようとしたポイムラー自身の歴史観にこそ当てはまると言えよう。

ここでポイムラーが突然、決定論的歴史哲学に「占星術的」とい

う言葉を用いていることは、いかにも唐突で異様に思われるのであるが、この語の用法はボイムラーに限られるのではなく、彼と交流のあったエルンスト・ユンガーにも見出される。ユンガーは『労働者』のなかで以下のように述べている。

「自然の至るところで我々は刻印と刻銘の関係に出会う。それは、例えば人間の八占星術的なV性格がその純粹な内面的性質よりもはるかに重要であるのと同じような仕方、原因と結果の関係の上位に置かれる。」

ここで言われる「刻印と刻銘の関係」とは、あらかじめ自然のなかに存在するとされる永遠不変な秩序を意味している。この秩序はア・ポステリオリに獲得される人間性ヒューマニテイに先立って人間存在のなかに刻まれており、それが人間と現実を決定づけているとユンガーは考えている。「占星術的」という語は、この決定論的な思考に与えられたものであり、そこにはボイムラーにおけるこの語の使用との共通性が見てとれる。したがって、「占星術的」とは人間存在や歴史に関するある特定の見方を示す言葉として理解されうるのである。

## (2) ボイムラーの「占星術的」芸術観

以上のような、神話の象徴を觀照し、そこから人間の歴史を逆照射するというボイムラーの神話的歴史哲学は、彼の芸術一般への理

解にそのまま適用されると考えられる。

もともと彼はカント美学について博士論文を書いた美学研究者であり、<sup>10</sup>そのカント研究のなかにはすでに美学と歴史の関連付けが見られる。そこには端的に、「判断力批判の新しい方法上の意義が最終的に目指していたのは、つまり、歴史である。」<sup>11</sup>と述べられている。

こうした見方はおそらく、当初ボイムラーが美術史を学んでいたヴェルフリンのもとで育んだものと推察される。ヴェルフリンの主張は、周知のように、美術の様式の変遷を、個人の志向や時代の社会的背景からではなく、より深い人間精神の発展から理解しようとするものである。そして、この方法がボイムラーの神話論とも重なり、彼の芸術観にも結びつくと考えられる。ヴェルフリンへの言及は彼が後に著した『美学』(Aesthetik) (一九三四)のなかにも見られ、ここでは次のように述べられている。

「形態の形成には自律した歴史が存在し、それを明らかにするべく新しい美術史、なかなづくハインリヒ・ヴェルフリンのそれは義務づけられているのである。まさに偉大な様式とは結局のところ、ある表現カテゴリーに由来する。それはすなわち、民族と人種の生および形態を作り出す力にはかならない。」(Ä98)

さらに続けて、ボイムラーは「様式史としての美術史は次のことを意味している。芸術は自律的なものではなく、原初的な現象

(ursprüngliches Phänomen) なのである。」(Ä99)と述べている。つまり、芸術を生み出すものは個人の「私的な告白」でもなく「天才の主観」(Ä99)でもなく、ある民族や人種の根源的精神だ、とされているのである。

そして、ボイムラーにとつてその逆もまた真であり、ドイツ民族の歴史と生のプロセスは「芸術の鏡のなかに」映し出されると言われる(Ä97)。そしてさらに注意を向けねばならないのは、ボイムラーがこうした芸術作品への観照を「プラトニズムへの回帰を意味するのではない」、つまり「美の無時間的なイデアを扱うのではなく、現実の人間の現世として歴史を浮き彫りにするレリーフ (Fisch-geschichtliche Hochbild) を扱うのである。」(Ä98)と述べている点である。ここには歴史を神話化する「占星術的」歴史観と同じ、方向性の逆転が見られる。ボイムラーは芸術の源に民族の生を探ると同時に、芸術から直接的に民族の現実の歴史を見ようとしたのである。

こうした芸術観は同時代の芸術作品にも適用されており、例えば、ボイムラーは親交のあったエルンスト・ユンガーへの書簡のなかで、第一次世界大戦の体験を描いたユンガーの作品のなかに「客観的な時代の象徴」が表わされていることを褒め称えている。<sup>12</sup>(強調原文)

ボイムラーは神話のみならず、芸術一般においても象徴を重視するのであるが、同じくユンガーへの書簡のなかで、象徴について次のように語っている。

「私が語る象徴は聖職者の世界に属するものではない。．．．象徴はけっして単なる記号ではない。象徴は注視されるものであり、情熱とともに感じられる現実 (Wirklichkeit) である。」  
「象徴は共同社会 (Gemeinschaft) の表現であり、感性的な人間の共同社会、外部世界の感覚的な表現である。」<sup>13</sup>

こうした記述からもまた、ボイムラーが象徴を介して芸術と外的現実を直接的かつ短絡的に結び付けているということが分かる。このような考えは社会主義リアリズムやアドルノの複雑な弁証法による芸術社会学などとは異なる、特殊なものである。この芸術観において、芸術は、現実には反映される星座の運行という占星術の連関におかれるであろう。したがって、ボイムラーの歴史観と同様、その芸術観もまた、「占星術的」と呼ぶことができるだろう。

以上のことから理解されるのは、こうしたボイムラーの「占星術的」芸術観は、トーマス・マンやD・H・ロレンスなど多くのモダニストが試みた、神話のなかに永遠で非歴史的な人間の真実を探求する営みとは似て非なるものだとということである。<sup>14</sup>

ボイムラーは『神話的な時代』において神話を人間存在の発展の普遍史とし、それを「真実の基準」としながらも、『美学』のなかではプラトニズムの無時間的なイデアから切り離し、芸術を形成する精神や魂はそれぞれの民族や人種に特有のものだという考えを前提にしている。しかしながら、これは神話と芸術を厳密に区別しているということを意味するのではない。なぜならボイムラーは『神

話的な時代』のなかで、すでに民族という概念を重視していたからである。この序文のタイトルがもともと「ロマン派の神話学者バツハオーフェン」だったことから分かるように、ボイムラーはバツハオーフェンをヨーゼフ・フォン・ゲレス<sup>15</sup>から始まる後期ロマン主義の流れに位置付けたのであるが、民族という概念は後期ロマン主義において普遍的な人間という概念と取って替えられた、鍵概念の一つであった。

このことが示すのは、バツハオーフェンに多くを依存し、ギリシヤ民族の神話・歴史研究という次元から始まったボイムラーの思考が、結果的にはギリシヤードイツという限られた文化圏に限定され、それを正当化するところにとどまるものであったということである。奥田敏弘氏が指摘するように、ボイムラーは「根源 Ursprung」のほか、「原初の世界 Urwelt」「先史 (Urzeit)」といった Ur(原) という言葉をしばしば用い、そこに過去に対する尊厳の感情をこめている。<sup>16</sup>しかし、こうした言葉を介した神話の絶対性の強調は、人間の普遍性の探求には繋がらず、結局のところ、ギリシヤという過去にまで遡るドイツ民族とその文化との正統性の主張というところに帰趨していると考えられる。むしろそこでは「太古」「原初」といった前歴史的であると同時に時間的でもある言葉は、神話的普遍性と歴史の野合を生み、それがボイムラーの「占星術的」歴史観と芸術観を生み出す源になっていると思われる。そういう意味では、ボイムラーの芸術観は、永遠性と歴史、形而上学と現実の双方に跨り、架橋するもの、まさに「占星術的なもの」とし

て受け止めるのが正しいといえるだろう。

そして、言うまでもなく、こうした神話と歴史の野合はナチスによる、北欧神話とアーリア人種、ゲルマン民族の優越の強引な結びつけのなかに見られるものである。<sup>17</sup>そのように考えるならば、ボイムラーの神話的歴史観・芸術観はたしかにナチ神話の先触れだったといえるであろう。

## 二・ゴットフリート・ベンの芸術観

次にゴットフリート・ベンの芸術論を顧みて、それをボイムラーと対照してみたいと思う。

ベンは世界大戦期のドイツに蔓延していたニヒリズムの空気に身を浸すと同時に、それが生む精神的な危機から逃れる方法を求めようとした。ベンにとってその方法とは、芸術の形式によって完璧な世界を作り上げ、その繭のなかに籠ることであった。そういう意味ではベンはゲオルゲ、ホーフマンスタールの流れを正しく受け継ぐ唯美主義者だったといえよう。

しかし、ベンの特異な点は、こうした世界がけっして、「象牙の塔」といった独我論的世界なのではなく、仮象を超えた現実であり、真実であるとされたことである。こうしたベンの芸術に対する考え方はひとまずニーチェの思想から得られたと考えられるが、その根底にあり、そうした世界観を支えたのはベン独自の芸術観であったと思われる。

## (1) 詩の創造と神話的なるもの

ベンが詩の創造において重視したのは、非合理的で神話的な次元とのつながりである。詩の形式とは個人的なファンタジーによってのみ獲得されるものではなく、自我の深層へと下降し、そこに存在する神話的階層を介して、絶対的な芸術的形象として獲得されるものだとベンは考えたのである。ベンは自我の陶酔のなかに、固有の生には限定されない「原形 (Grundform)」「すなわち始原的な (primär) ものへの通路を見出し、それを持続的で完璧な形式に結晶させることこそ、詩人の仕事であるとした。

そうしたベンの考え方は一九三〇年に書かれた「詩の問題について」<sup>19</sup>のなかにはっきりと表現されている。しかし、ベンはここで、ボイムラーとは異なり、詩の歴史への関与をきっぱりと否定している。ベンは現代が啓蒙主義的理性と「実用主義的で実証主義的な見方」(GB.III.233)によって支配される時代であるとし、これらこそベンにとってニヒリズムの元凶にほかならないのであるが、詩人はそうした時代とは縁を切り、幻想と陶酔によって自我のなかに深く、ひたすら下方へ沈降していくことによって、「より始原なるものの内部」に到達するのだとベンは言う。ベンによれば、それは個々の自我が存在する以前からすでに在る「精神の根幹」(GB.III.243)であり、「先史 (Urzeit) や根源 (Ursprung) をその中に抱いている原始民族以来」われわれの身体のなかに横たわっているものである (GB.III.246)。ベンは次のように述べている。

「いつも、あらゆる時代に彼 (詩人) は帰ってくる。彼にとってあらゆる生は深淵、はるか昔の原始の深淵からの呼びかけであり、全ての移ろいゆくものはただ、ある未知なる原経験 (Urerlebnis) が繰り返される同じものであり、それが自身のなかに記憶を求めめるのだ。」(GB.III.247)

このようなベンの考え方はユングが神話を分析し、そこに発見した「原型 (Archetypus)」に近いものであると考えられる。実際にベンは「精神の根幹はあらゆる人種、あらゆる歴史を通じて、そこから同一性を濾し取るのだ。」と述べ、その具体的事例とともにユングの名を挙げている (GB.III.243)。

以上のベンの芸術観をボイムラーのそれと比べて直ちに気づくのは、ベンも同じく、Tiefe のほか「根源 (Ursprung)」「先史 (Urzeit)」「原経験 (Urerlebnis)」などU-がつく言葉を好んで用いていることである。ここからベンはやはり、ボイムラーと同様、芸術のなかに神話的なもの、根源的な精神の存在を認めていることが理解される。

## (2) 芸術から歴史へ

しかしながら、一方でベンは、ボイムラーとは異なり、芸術を歴史から切り離していた。精神の根幹はあらゆる人種、あらゆる歴史を通じて同一であるという言葉からも、ベンが芸術のなかに捉えているのは、民族の伝承といった歴史的次元ではなく、人間精神一般

のなかに永劫回帰する神話という普遍的次元であるように思われる。少なくとも、芸術の創造が呼び起こす熱狂のなかにベンが「南方」と呼ぶ彼岸のユートピアを求めていた初期、そして、ナチズムに失望し、己の孤高な芸術世界のなかに閉じこもった後期のベンについては、この見方は妥当であるかもしれない。

しかし、ベンがナチズムに接近していった時期の論考を顧みると、ベンが詩人は歴史過程に関与しないという自らの主張を裏切っていることが分かる。ナチスが政権を獲得した時期に書かれたゲオルゲ論<sup>20</sup>のなかで、ベンは次のように述べている。

「創造とは形式を求めることであり、人間は表現を求める叫びですが、国家は表現へと向かう第一歩であり、芸術はその次の一歩です。それ以上の歩みを私たちは知りません。」

「形式とは創造であり、創造の原理、前提、その最も深い本質です。・・・形式というかわりに、私たちは規律、秩序、鍛練、あるいは、規範、秩序の必然性といってもよいでしょう。これらの言葉は、その名のもとに例の歴史運動が自己を刻印しようとしたものであり、私たちに耳慣れた言葉になりましたが、これこそがゲオルゲの領域なのです。」(GB.III.108)

「それは美的な意志です。芸術作品の中で一つの世界を築き、それを形成しながら克服するドイツ的意志、これこそ、ゲオルゲが、未来の偉大な西洋の展望の中に与えているものなのです。」(GB.III.109)

ここで言われる「歴史運動」とは明らかにナチズムを指しており、この引用が明白に示しているのは、いまやベンは、芸術の形式的創造をドイツの歴史の形成に引き移しているということである。

一九三四年のエッセイ<sup>21</sup>でも同じような重ね合わせが見られ、そこでベンは芸術を、「生の上に聳え立ち、それを解消し、修復し、その節度を守るように命令する偉大な法則」(GB.IV.187)とし、「形式主義」を「芸術を美的なものから人類学的なものへと移し入れ、その叫びを人類学的な原則に移し入れる、ほとんど宗教的な試み」(GB.IV.195)であると述べている。そして、ベンにとってゲオルゲという新しいドイツ精神はニーチェ、ジークフリートを辿ってギリシャのドーリアの世界にまで遡るものとされているのである。

ここに至ってベンがボイムラーと同様の方向性、つまり、芸術に絶対的な根源を認め、そこから歴史を照射する「歴史の神話化」の方向を辿っていることが明らかになる。ベンはナチスの登場が「完全に普遍的かつ決定的な人類学的転回点」であることを確信した。それはベンの目にあたかも「神話の復活」(GB.III.402)であるかのように映ったのである。ベンは新しい国家の展望について次のように語っている。

「・・・もし政治的な視点と美的な視点が一致したならば、実際に、全体国家が立ちあがるだろう。その多彩な、ほとんど汲みつくされることがない、創造の本質にかなうような偉大で卓越したドイツの像を描き出すべくそれは立ちあがるのだ。」(GB.IV.23)<sup>22</sup>

以上のことから分かるのは、ここにはたしかに芸術の普遍性によって民族の歴史を正当化するという矛盾した力学が働いていると同時に、神話の普遍性と歴史の直接的な結びつけが見られるということである。詩の絶対的な根源は、人類的普遍性の傍らを通り過ぎて、ドイツ芸術と民族の称揚へとつながり、さらにナチスという歴史的事実の正当化へと短絡されていくのである。ベンもまたボイムラーと同様、因果関係の束としての歴史を否定したうえで、民族の精神の根幹がそこにある神話としての芸術を絶対化し、そこから歴史を逆に照らし出している。ここから、ベンの芸術観もまた、ボイムラーと同じく「占星術的」と呼ぶことができると思われる。

## 結

以上のようなボイムラーとベンの「占星術的」芸術観は今日の私たちから見ると、おそらく奇異に思われるであろう。しかし、彼らが生きた大戦期は、こうした神話、象徴、民族という概念を通して歴史を観るといふ考えが異常な魅力と説得力を持ちえた時代であった。

そうした思考方法の代表としては、例えば、シュペングラの『西欧の没落』が挙げられようが、そこで彼が試みたのは、形態、象徴、直感によって各文化固有の「原象徴」を把握することであった。<sup>23</sup> それによってシュペングラは世界史が生物と同じ法則によって循環していることを「発見」し、西欧の没落を予言したのであ

た。また、サンデイカリズムの理論的支柱となったジョルジュ・ソレルの『暴力論』は、「神話」という非合理的な力がプロレタリアート革命という未来の実現の原動力となると主張した。<sup>24</sup>

こうした神話的思考が流布した背景には、世界の無秩序状態から不気味に生じてくる無限性に対する人々の恐怖があり、そこに一定のヴィジョンやイメージを付与しうる神話的思考はそうした「無世界性」から人々を解放した。だからこそ、それは大戦期のヨーロッパにおいて支配的な精神となりえたのである。<sup>25</sup> ベンとボイムラーの芸術観の類似は、表現主義とナチズムがともにこうした時代を背景に生まれたということを示唆しているだろう。

また、ベンとボイムラーの「占星術的」芸術観は、神話という方法論の両義性を我々に教えてくれる。すでに触れたように、神話とは、急激な変化を遂げる社会のなかで変わらぬ人間性を探求しようとしたモダニズム、とりわけモダニズム文学においてきわめて重要な方法の一つであった。そのことは、イエイツ、エリオット、パウンド、ジョイス、トーマス・マン、ヘッセといった名によって直ちに了解されるだろう。神話は一方ではヒューマニズムの豊かな源泉であった。しかし同時に、神話に魅了されたパウンドがファシズムに心ひかれ、ムッソリーニの崇拜者となったという事実を忘れてはならないだろう。普遍性と同時に伝承性、慣習、民族、大地といった歴史的要素と地続きになっている神話は、一方において歴史を神秘化するドグマティズムにも通じているのである。その神話的思考の両側面を隔てているのはおそらく、完全な壁ではなく、半過

性の薄い膜のようなものだと考えられる。ベンとポイムラーはいずれも、戦後になって形而上学的なものを歴史なものとして扱った自らの過ちを振り返り、神話あるいは芸術を歴史から引き離している。しかし、それで問題は解決したとはいえない。なぜなら、神話の両義性は依然としてそこに横たわっているからである。

さらに、ポイムラーとベンのナチズムへとつながる神話的な歴史観、そしてその結果としてのナチズムの肯定が、芸術と美学という土壌から生まれ、それを滋養にして育っていたという事実にも目を向けなければならない。むしろ、こうした不幸な関係は歴史、社会との複雑な因果関係から生じているのであって、それを一般化するならば、それはまた歴史を神話化することになるだろう。しかし、それでもやはり、この事実、芸術が神話との血縁を完全に断ち切ることでできない以上、危機的状況のなかで神話という回路を通じて政治と結びつき、影響を及ぼす力にもなりうるということを示していると思われる。

△本文中の略記について▽

以下の著作からの引用は略記号を用い、頁番号をアラビア数字で表記することとする。なお、全集の場合は巻次をローマ数字で表す。

MW—Alfred Baumler. *Das Mythische Weltalter*. München, 1965

Ä — Alfred Baumler. *Ästhetik*. München, 1972

GB—Gottfried Benn. *Sämtliche Werke*. Stuttgart, 1989

1 この関係は一九三〇年代にすでに「表現主義論争」において論じられていた。これについて本質的な指摘をしたのはルカーチの論文「表現主義の『偉大さと頹落』」である。Georg Lukacs. 『Größe und Verfall』 des Expressionismus. *Probleme des Realismus I*. Berlin: Luchterhand, 1971, S. 109-149. しかしながら、第二次世界大戦後、この論争にスポットがあたり得る機会が稀であったといつてよい。この問題が再び取り上げられるようになったのは近年のことである。A. K. ウィードマン『ロマン主義と表現主義』大森淳史訳、法政大学出版局、一九九四年、二八六―二九五頁、池田浩士『闇の文化史—モンタージュ一九二〇年代』、インパクト出版会、二〇〇四年、三八六―四〇〇頁、など。

2 ベンとナチズムの関係については以下を参照。森田明「ゴットフリート・ベンのナチズム」『名古屋市立大学教養部紀要 人文社会研究』22号、一九七八年、山本尤「ヒトリズムを芸術化したベン」『自由』13巻5号、自由社、一九七一年。Reinhard Alter. *Gottfried Benn: The Artist and Politics (1910-1934)*. Bern: Herbert Lang, 1976. Walter A. Strauss. 'Gottfried Benn: A Double Life in Uninhabitable Regions.' Richard. J. Golsan. (ed.) *Fascism, Aesthetics, and Culture*. Hanover: University of New England, 1992

3 ポイムラーに関する研究はいまだ数少ないが、国内では以下の文献が見出される。奥田敏広「母権論とロマン主義、あるいは歴史と神話—ポイムラーのバハオーフェン受容をめぐって」『ドイツ文学研究』京都大学総合人間学部ドイツ語部会編、二〇〇〇年四月、新町貢「神話の中の『回帰』と『発展』—マンとポイムラーの神話観について—」*Rhodus Zeitschrift für*

- Germanistik, Nr.18, 2002。筑波ドイツ文学会、「アルフレート・ボイムラーによる二つのバハオーフェン論」筑波大学文藝言語研究 文藝編 43巻、二〇〇三年三月、同著者「バハオーフェン、ニーチェそしてボイムラー」筑波大学文藝言語研究 文藝編 44巻、二〇〇三年一〇月、同著者「アルフレート・ボイムラーの『デュオニユッス』概念について」筑波大学言語研究 文藝編 45巻、二〇〇四年三月、森田團「象徴の歴史化―アルフレート・ボイムラーによるバツハオーフェン解釈の側面」『ヨーロッパ研究』東京大学大学院総合研究科、二〇〇五年。ドイツでは主要な文献としては以下が挙げられる。Marianne Baemler, Hubert Brunträger, Hermann Kurzke. (Hg.) *Thomas Mann und Alfred Baemler: eine Dokumentation*. Würzburg: Königshausen & Neumann, 1989, Hubert Brunträger. *Der Ironiker und der Ideologe: Die Beziehungen zwischen Thomas Mann und Alfred Baemler*. Königshausen & Neumann, 1993, Werner Bräuninger. *„Ich wollte nicht daneben stehen...“: Lebensentwürfe von Alfred Baemler bis Ernst Jünger*. Austria: Ars Verlag, 2006, Ulrich Fröschle / Thomas Kuzia. *Alfred Baemler und Ernst Jünger*. Dresden: Universitätsverlag & Buchhandel Eckhard Richter & Co., 2008, Max Whyte. *The Uses and Abuse of Nietzsche in the Third Reich: Alfred Baemler's "Heroic Realism"*; *Journal of Contemporary History*, April 2008, Volume 43, No. 2<sup>1</sup> Johannes Keil. *Alfred Baemler — Ein Nationalsozialist?*, Dresden: Technische Universität Dresden, 2004
- 4 拙論「美学から政治ノーマットフリード・ベンとアルフレート・ボイムラー」『論叢』第6号東京芸術大学美術学部、二〇一〇年二月を参照。
- 5 占星術と神智学、ユングとの関係については以下を参照。松本夏樹「ド

- イツ占星術の若干の主題についてのメモ」入江良平「二匹の魚―ユングと占星術」いずれも『ユリイカ』25号巻6号（一九九三年六月号）所収。
- 6 ベンヤミン等のバツハオーフェン論については以下を参照。『バツハオーフェン論集成』白井隆一郎編、世界書院、一九九二年
- 7 これについて新町氏が前掲論文「バハオーフェン、ニーチェそしてボイムラー」のなかで論じている。
- 8 この「神話の歴史化」から「歴史の神話化」への逆転について奥田氏が前掲論文「母権論とロマン主義、あるいは歴史と神話―ボイムラーのバハオーフェン受容をめぐって」の中で触れている。二七―二八頁参照。
- 9 Ernst Jünger. *Sämtliche Werke. Bd.8. Der Arbeiter*. Stuttgart: Klett-Cotta, 1981, S.236
- 10 上の博士論文「カント美学における普遍妥当性の問題 Das Problem der Allgemeingültigkeit in Kants Ästhetik」は一九一五年に書かれた。
- 11 Alfred Baemler. *Das Irrationalitätsproblem in der Ästhetik und Logik des 18. Jahrhunderts bis zur Kritik der Urteilskraft*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1967 (1923), S.15 ボイムラーのカント美学研究における美学と歴史の関係についてはHubert Brunträger. *Der Ironiker und der Ideologe: Die Beziehungen zwischen Thomas Mann und Alfred Baemler*. Königshausen & Neumann, 1993, S.49-50を参照。
- 12 Ulrich Fröschle, Thomas Kuzias. *Alfred Baemler und Ernst Jünger*. Dresden: Universitätsverlag & Buchhandel Eckhard Richter & Co., 2008, S.133f
- 13 ebenda, S.150, 151
- 14 モダニズム文学における神話観については以下を参照。マイケル・ベル

- 『モダニズムと神話―世界観の時代の思想と文学―』吉村宏一他訳、松柏社、二〇〇〇年
- 15 ヨーゼフ・フォン・ゲレス（一七七六―一八四八）ドイツの思想家。一九世紀前半のドイツ・カトリックの精神的指導者。ナポレオンの衰退とともに高まったドイツ民族主義風潮の先頭に立った。
- 16 奥田敏広「母権論とロマン主義、あるいは歴史と神話―ボイムラーのバハオーフェン受容をめぐって」、二四頁
- 17 これについては以下を参照。アルフレート・ローゼンベルク『二十世紀の神話』吹田順助他訳、中央公論社、一九三八年
- 18 例えば以下のニーチェの言葉はベンにとつてきわめて重要な意味をもっていたと思われる。「△仮象性▽はそれ自体現実には属している。それは現実存在のひとつのかたちである。・・・△仮象性▽はしかるべく形作られ、簡素化された世界であり、そこでわれわれの実践的本能が働くのである。そのような世界はわれわれにとつて完全に真実である。」Friedrich Nietzsche. *Sämtliche Werke: Kritische Studienausgabe in 15 Einzelbänden*. Berlin: W. de Gruyter, 1988, Band.13, S.271
- 19 'Zur Problematik des Dichterschen' (1930)
- 20 'Rede auf Stefan George' (1934) これはケオルゲ追悼演説として書かれたものではない。
- 21 'Lebensweg eines Intellektualisten' (1934)
- 22 'Deutscher Arbeit zur Ehre' (1933)
- 23 O. Spengler. *Der Untergang des Abendlandes*. München: C. H. Beck, 1973 (1918)
- 24 Georges Sorel. *Réflexion sur la violence*. Paris: Marcel Rivière, 1921
- 25 こうした神話の流布については以下を参照。Kurt Sontheimer. *Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik*. München: Nymphenburger, 1962. E. カッシーラー『国家の神話』宮田光雄訳、創文社、一九六〇年、上山安敏『神話と科学―ヨーロッパ知識社会 世紀末〜20世紀』、岩波書店、二〇〇一年